［研究ノート］

# テロワールからテレストリアルへ：
## 茶栽培における大地のマルチスピーシーズ民族誌についての一考察

# From Terroir to Terrestrial:
## A Study on the Multispecies Ethnography of the Land in Tea Cultivation

**張 威**
Wei ZHANG

キーワード
茶 / チャ、テロワール、テレストリアル、ジオントロジー、マルチスピーシーズ民族誌
tea, terroir, terrestrial, geontology, multispecies ethnography

**Abstract**: While much attention has been given to the human-plant relationship in multispecies ethnography, the land has not been adequately discussed. This paper aims to explore the multispecies ethnography of the land by examining the case of tea cultivation in Wuyi Mountain, Fujian Province, China, using Bruno Latour's "terrestrial" and Elizabeth Povinelli's "geontology" concepts as clues. In Wuyi Mountain, the land not only creates a suitable environment for tea cultivation, but also provides Wuyi Rock tea with "Yan Yun". Yan Yun is the unique flavor of Wuyi Rock Tea, which can also be described as a kind of "terroir". It can be also said that the Yan Yun has been shaped by the intertwining of multiple "terrestrials"—as Latour put it—, including life and non-life. Because it is not just a resource for humankind, but a complex generative interaction of the physical environment and biological activity.

As the land of Wuyi Mountain has been used as a resource for national park and tourism development, humans and nature can be seen to be disconnected. The land, which is both "terrestrial" for tea farmers and non-life as an emotional and subjective entity, is dead in the eyes of the government and is used only as a development resource. This has only spurred tea farmers to negotiate compensation payments and has left them further and further removed from the land, their spiritual home, on which they have been so deeply dependent.

Nowadays, the bargaining over land rights—to follow Povinelli's

discourse on “geontology”—should be understood as a matter of “life {birth, growth, reproduction} vs death” and “life vs non-life”. This is the tentative conclusion of this paper, which extends the multispecies ethnography with a view to the land, in place of a Foucauldian theory of biopower over humans.

## 1. はじめに

本稿では、大地を含めた植物をめぐるマルチスピーシーズ民族誌を探求してみたい。その際、生物種に限定される傾向があったマルチスピーシーズ（多種の）人類学[1]に、大地や気象、自然物、人工物などをすでに想定していた存在論的人類学を呼び戻すことによって、議論を進めていきたい。本稿は、存在論的人類学者のブリュノ・ラトゥール（Bruno Latour）に加え、大地の存在論の提唱者エリザベス・ポヴィネッリ（Elizabeth Povinelli）の議論に基づき、「テレストリアル」（ラトゥール）と「ジオントロジー」（ポヴィネッリ）の概念を手がかりとして、筆者の調査した中国福建省の武夷山における茶栽培の事例を検討することで、大地のマルチスピーシーズ民族誌を探求することを目的とする[2]。

近年、マルチスピーシーズ民族誌およびそれと関連する研究において、人間と植物種の関係性にも目が向けられている（Miller, 2019 ; Chao, 2018）。しかし、これらの研究では、植物の生育の場所が人間以上の景観としていかに作られているのか、植物が植えられている場所である「大地」と人間がどのように関係性を築き上げているのかに関する考察を深めるに至っていないように思われる。大地は植物が自生したり、植栽されたりする場だけでなく、動植物や人間が生きる場でもあるのだ。



まず、大地との関係性を論じるにあたって、これまで大地や土地に関してどのようなマルチスピーシーズ的な研究が行われてきたのかを見てみよう。

チーズ、ワイン、茶などの食品や嗜好品の流通においてはこれまで、産地の「テロワール（terroir）」が重要視されてきた。テロワールは、ある場所で作られた食べ物や飲み物に、その「場所の味（taste of place）」があることを指す（Trubek, 2008）。気象条件（日照、気温、降水量）、土壌（地質、水はけ）、地形、標高などの特徴は、産地特有の物理環境が農産物に独特の味わいを与える（Barham, 2003 ; Trubek, 2008）。

グローバル資本主義が急速に進展する中で、農作物は産地の場所との関係に意味を見出せなくなった。茶やコーヒーのモノカルチャー（単作）はその典型だが、消費者には農作物が育つ場所が見えなくなってしまったのである。そこで、作物の生育する場所の価値を取り戻す可能性を開くべく、テロワールの重要性が強調されるようになった。一方、モノカルチャーを進める作物の生産や流通、消費といった流れの中で、テロワールはもっぱら人間によって利用されている。

茶のテロワールに関するこれまでの研究は、茶の味と物理環境との密接な関係性を解明している（Besky, 2013 ; 肖（しょう）、2020、pp.21-53）。また肖の研究では、おもに人間（文化）と自然、中央と地方という人間社会の政治・経済の図式が説明されている。ところが、これらの研究では、人間にもっぱら中心的な役割が与えられてきており、物理環境（自然）は人間の行為とは無関係で、把握可能な資源として取り扱われてきたという問題がある。自然や物理環境は常に人間の外部に位置づけられるものとして二元論的に扱われてきた。自然が資源化され、人間のコントロール下

にある客体として扱われてきたのである。

テロワールをめぐる人類学の研究は、このように人間を中心に位置づける傾向があった。次節では、近年ラトゥールによって再評価されたラブロックのガイア仮説およびラトゥールの説くテレストリアルに注目してみたい。

## 2. ガイア仮説を経て、テレストリアルへ

英国の大気科学者のラブロック（1989）によれば、地上に存在する生物は、地球の化学的状況や地質学的状況の生成プロセスに参加している。彼はまた、地球が自己調整機能をもった動的な存在であり、物理環境を制御することによってわれわれの住む惑星の健康を維持する力を備えていると説いてもいる。こうした動的な理解のもとにラブロックは大地を捉え直したのである。

「ガイア」とは、地下・地表・地上を含めたおよそ数キロメートルの薄い膜状の地球生命圏のことである（ラブロック、1984、p.14）。ガイア仮説によれば、気温、酸化状態、酸性度、および岩石と水の一定側面はいついかなるときにも一定に保たれ、この恒常性は生物相の自動的かつ無意識的な操作を受ける積極的フィードバック過程によって維持されている（ラブロック、1989、p.52）。

こうしたガイア仮説を引き継ぎながら、ラトゥールは人間と大地の相互的な関わりを通して、ガイアとしての地球を作り続けるプロセスの重要性を説いた（ラトゥール、2019；森、2021）。ガイアには、動植物や細菌だけでなく、生物によって長い時間をかけて変質させられ生成させられてきた、大気、土壌、岩、海洋、雲、鉱物など、その他の同居者が含まれる。ラトゥールによれば、それらはすべて、あらゆる障害を乗り越えて自己創出したのである。ガイア仮説では、物理環境でさえ活性的なものとして描かれる（ラブロック、1984；ラトゥール、2019；奥野、2023）。ここにテロワールを再考する視点がある。

ガイア仮説を土台として、ラトゥールは「テレストリアル（大地、地上的存在、地球）」の概念を提唱している。テレストリアルとは、物理環境と生物活動の相互生成のことである。テレストリアルにかかわる事象は、宇宙から眺めれば、大地と地質基盤のあいだのわずか数キロの厚みしかないごく薄い空間で起きていて、その生命薄膜のことをラトゥールは「クリティカルゾーン」と呼んだ（ラトゥール、2019）。

他方、ラトゥール（2019）によれば、これまでの政治は人間が中心であり、人間の主体だけが世界を変えることができるという考えに基づいていた。そのような政治は、「生産システム」によって支えられているとラトゥールは指摘している。それが発動する原点には、エージェンシーをもつ人間と、その外部に位置づけられる動かない資源という区別がある。そうだとすれば、テロワールの問題とは、生産システムの問題でもあったのだ。茶のテロワールとは、茶を人間の外部にある資源とする、生産システムの中で産出された概念枠組みだったことになる。

それに代えて、ラトゥールが新たな政治と経済の体制として提起するのが、「発生システム」である。それは「依存」を原理とし、人間に「分散的な役割」を与え、「発生」を関心の対象とする。そこでは、動植物や微生物などの生物活動と、山や川、気候などを含む物理環境が相互生成する。発生のシステムは、人間のために資源を利用したり商品生産したりすることではなく、複数のテレストリアルを発生させることに関心を払う（ラトゥール、2019、p.127；奥野、2023、p.236）。テレストリアルを通じて、複数のエージェントが織りなす連結的行為に目を向けていかなければならないとラトゥールは説く（ラトゥール、2019、p.124）。

ラトゥールは、生産システムにおける「機械的な自然観」を払拭し、地球上のあらゆる存在（鉱物などの非生命体も含めて）に対してエージェントの地位を認める世界観を唱えている。これにより、人間を唯一のエージェントとしての地位から引きずり下ろし、その結果、世界の理解の枠組みを「機械的作用」から「発生」へと変えようとする（ラトゥール、2019；池田、2020）。

人間だけでなく、動物、植物、鉱物、気体などの非人間をも含めた複数のテレストリアルが依存しながら生み出す生態の動態に目を向けることは、テロワールのようにそれらを人間の外部に存在する動かない資源ではなく、クリティカルゾーンそのものの潜勢力に目を向けることにつながる（ラトゥール、2019；奥野、2023）。その意味では、地上に生きる生物には受動的なものは、いっさい存在しない。動植物、菌類、ウィルスなど地上に生息するすべての存在が活動すると理解することができよう。これが、ラトゥールのテレストリアルの見取り図である。

こうした存在論的人類学におけるテレストリアル論と同時に発展してきたのが、大地存在論[3]、つまりジオントロジーである。

## 3. ジオントロジー

ラトゥールが論じた物理環境と生物活動の相互生成という一種の非生命と生命の問題を継承しながら、生命と非生命、生と死を取り上げようとするのがポヴィネッリである。ポヴィネッリの考え方の基盤にあるのは、フーコー的なバイオパワー（生権力）からジオントパワーへの移行である。人間中心主義的に考察を進めてきたバイオパワーは、人間社会における生権力のあり方を論じてきた。それに対して、ジオントパワーは、ジオ（大地）とオント（存在論）を組み合わせて論じ、ポヴィネッリが新たに唱えた概念である。



ポヴィネッリは、白人中心主義のオーストラリアにおける先住民をめぐるジオントロジー／ジオントパワー（geontology／geontopower）を取り上げている。彼女が問題にするのは、先住民の土地に眠る鉱物資源を狙う採掘資本主義が好き放題に振る舞う2000年代以降の後期リベラリズム[4]において、先住民が見たり聞いたりする風や小川、岩や砂漠といった「大地」の力が無視されてきたことである。先住民も、また彼らが先祖から受け継いだこれら「大地」の声や姿も、近代的な法制度、植民地主義政策において政治を構成する「市民」とは見なされない。なぜなら、彼らは非生命と見なされているからである（Povinelli, 2016；森、2021、pp.240-241）。

ポヴィネッリが『ジオントロジー』の中で論じているように、ジオントロジーという概念は一方で、すべての存在を生命に関連する特質を備えたものとして特徴づけることにより、諸存在を生物学的に囲い込むことを強調する。他方で、後期リベラリズムにおいて、長い間自明であった権力の形態[5]が世界中で目につくようになってきた今日、それを説明する批評的言語を見出すことの難しさを浮き彫りにする。ポヴィネッリはジオントロジーを、後期リベラリズムの図式的戦術を可視化するための概念として用いている（Povinelli, 2016）。

バイオパワーは、誕生、成長、生殖と死というプロセスを挟む生と死を併せもつ点で西洋では、「非連続的」であるが、オーストラリアの先住民社会では、「連続的」に捉えうるものだと言う。バイオパワーは、ビオス（bios）／ジオス（geos）の二項対立の中に位置づけられる。ポヴィネッリ（2016, p.9）によれば、それは、「生命（生｛誕生、成長、生殖｝対死）対非生命」という図式で表れる。フーコーのいう生政治（バイオポリティクス）では、「生｛誕生、成長、生殖｝対死」のみに焦点があてられることで、「生命と非生命」のビオスとジオスというより大きな枠組みの考察検討が犠牲となってきたのである。オーストラリアの土地請求は、「生｛誕生、成長、生

殖}対死」と「生命と非生命」の境界で働いているとポヴィネッリは主張する（Povinelli, 2016；Elizabeth, P., Coleman, M., & Yusoff, K. 2017）。他方、先住民の土地請求権は、典型的には、先住民の生の生きた景観認識を要求し、それゆえに「生命と非生命」の境界を覆す。

ポヴィネッリは「砂漠」、「アニミスト」、「テロリスト」というジオントロジーの三つの図式[6]を用いて、想像力と創造性に拠りながら、生物活動と物理環境が相互生成する局面に光を当てようとする（Povinelli, 2016 ; Povinelli, 2021）。

彼女によれば、オーストラリアの先住民は、聖地に宿る「生命」を、ドリーミングを通して認識してきた。それは先祖代々の土地というだけでなく、先祖代々の各親族固有のドリーミングの系譜として「生命」を有している（Povinelli, 2016 ; 森、2021）。

ポヴィネッリは、死んだ先祖、生きていない風や岩、砂漠や先住民のドリーミングなどの非生命の存在論をジオントロジーと呼ぶ。そのことを通して、採掘資本主義と国家が共犯して、それらを先住民の「伝統文化」という枠内に閉じ込めて、補償金の問題に矮小化して捉えようとする「政治」を探求しようとする[7]。

これまで、植物のマルチスピーシーズ民族誌の新たな展望を築くために、2節ではテレストリアルという概念に拠りながら、物理環境と生物活動が相互生成する研究の概要を見た。その上で3節では、テレストリアルという存在論を大きく大地へと拡張し、生命と非生命を共に扱うジオントロジーという枠組みの可能性を検討してきた。このように、大地の存在論を政治権利との連動の中で一望する見通しが得られたのである。以下では、中国福建省の武夷山周辺地域における民族誌調査を通して得られたデータを検討してみよう。



## 4. 武夷岩茶の岩韻をめぐるテレストリアル

ウーロン茶と紅茶の原産地である中国福建省の武夷山は、気候変化が大きく、温暖湿潤で、四季がはっきりしている。武夷山の地質は白亜紀の武夷層に属しており、茶園の土壌は、おもに火山性礫岩、赤色砂岩、頁岩で構成されている。茶園では、24～29％の砂利、50％の空隙率、良好な土壌浸透性、高い各種金属元素の含有量、適度な酸性度があるため、武夷岩茶の栽培に適している（武夷山市编撰委员会、1994、pp.110－111；冯、2000、p.43）。ここで生産される茶が「武夷岩茶」であり、そのテロワールは「岩韻」と呼ばれてきた。武夷岩茶の岩韻はどのように形成されてきたのだろうか。

約4億年前、カレドニアン運動によって武夷山脈が隆起し、最初の大地が形成された。インドシナ方面の地殻変動および燕山運動の影響で、武夷山脈が持ち上がり、東西に大規模な断層ができ、多くの小河や湖沼群、山間盆地が生まれた。その後、温暖多雨の気候条件の下で、岩は熱膨張と収縮を繰り返し、水、風などの作用を受けて、砂質土壌が形成されたのである。長年の沈殿と風化の結果、土中ではカリウム、マンガンなどの微量元素に富み、適度な酸度（pH値は4.5～5.5）があり、通気性が良いので、茶栽培に適した土壌が存在する（中国地理百科丛书编委会、2015；黄、2015；赵（ちょう）、2020）。7000年前頃に、そこに原生していたチャノキ（Camellia sinensis）が発見されたとされる（萧、2008 ; 布目、2012）。

武夷山周辺の気候は、チャノキの物質代謝に直接影響を与えるだけでなく、茶園の土壌の物理的・化学的条件、茶葉に含まれる岩韻にも大きな影響を与える。山や太陽光の強さ、日照時間、気温、湿度、雨が相互作用し、茶園それぞれの微気候を形成する。チャノキは「散乱光」（あらゆる方向に反射して地上に達する光を指す）に含まれる青紫色光を吸収し、光化学作用によって化

学物質クロロフィルbを多く生成し、さまざまなアミノ酸を形成することができる。そのことが岩韻を高めると考えられてきた。武夷山の山間部では曇りの時間が長く、散乱光が多いところでは窒素化合物が富むことから、芳香物質が増える。また、雲が太陽光を濾過し、光の強さを弱める一方で、散乱光を生み出すことで岩韻の形成を支える（邵、2016）。

植物もまた、岩韻の花の香りの形成にも寄与する。コケやラン、野生ユリなどの地衣類や植物がチャノキと共存しており、茶に香りや風味を与える。茶園には、木本植物と草本植物が生えている。木本植物の落ち葉は、おもに土壌表面に集められて微生物の作用によって、徐々に酸性物質（有機酸、炭酸、硝酸）が生産されるため、チャノキの生育環境が整えられる。草本植物は、おもに根系の枯れのために、土の深いところでチャノキに有機物、窒素を与えることができる。さらに、気温・湿度が高まるにつれて、土の中の微生物の活動は、有機物の分解を加速することができ、チャノキにたっぷり栄養を提供することができる。

他方、土壌には岩や塩分が豊富で、野生動物、とくにホエジカやイノシシが岩に付着した養分を食べにやってくる。動物は、土、岩との物質やエネルギーの交換を通じて土の変化に関与する。動物の掘削活動により土の透水性や通気性が影響を受ける。微生物は、植物や動物を分解することによって、チャノキの生育に不可欠な要素である窒素、リン、カリウムを土壌に豊富に供給する。それらによって、岩韻の形成が促される（韩（かん）、2011；中国地理百科丛书编委会、2015）。このように、岩韻形成には、物理環境と生物活動が相互に関与している。

## 5. テレストリアルにおける人間活動



ところで、武夷山の茶栽培の歴史は南朝時代（420-589年）に遡る。最古の文字記録は唐の元和年間（806-820年）に現れる（萧（しょう）、2008；中国茶叶博物館、2019）。茶農家たちは、岩韻の蓄積に適したチャノキ品種を育種・栽培してきている。例えば、60代の茶農家W氏は、「茶の品種は岩韻を決定する物質的基盤である。武夷山にはおもに水仙、肉桂、大紅袍という3種類のチャノキが植えられている。チャノキはほとんどが低木型で、樹齢は古いが、生産量は安定しており、生葉の質も優れている。樹齢15年以上の新鮮な葉で作られた武夷岩茶は岩韻がはっきりしている」と言い、茶の品種と岩韻の関係性を示唆してくれた。

次に、人間は茶園の土壌をいかに管理しているのだろうか。そこにも岩韻が深くかかわっている。茶農家たちは、チャノキや土壌の管理に関する多くの経験を蓄積したり、改良したりして、独自の「武夷農法（中国語では武夷耕作法）」を形成してきた。茶農家L氏は、以下のように武夷農法でいかに茶の岩韻を作り出しているのかを説明してくれた。

> 旧暦の7月は深耕の季節で、この時期に茶園の土を緩めて深く掘ると、チャノキの根が深く成長し、養分を吸収しやすくなる。深耕と同時に、土壌の状況に合わせて、「客土」を行う。これが武夷農法の最も特殊な部分である。具体的に、栽培して何年も経って肥えなくなった茶園の土を掘り出して、別の場所から新しい土、あるいは岩壁の風化土や腐殖土を集めて、肥料を与える代わりにして、土壌の肥え具合を新しくする。「客土」の意義は、土壌の肥沃さを保つことにあり、土壌流失のある地方に持続的にチャノキを栽培させ、土壌流失によってチャノキの内包物質―岩韻―が減少しないようにする（2023年9月10日筆者インタビュー）。

このように、武夷農法は土壌の風化を促進して、土壌の深層から鉱物元素を吸収して、チャノキの日照りと寒さに抵抗する能力を高める。さらに、チャノキの根の成長を促進して、十分に土中の栄養物質を吸収して岩韻を作り出す。武夷山周辺地域の多くはこの方法で茶園土壌の有機物と微量鉱物元素を補充し、岩韻を育成する重要な手段となっている。

加えて、チャノキは、酸性の土が好きな樹木であり、土を酸化してやる必要がある。岩韻の甘み成分は、アミノ酸である。アミノ酸はチャノキの根で生成され、茶葉に運ばれる。このような味の茶を作るためには、大量の窒素をチャノキに吸収させる必要がある。

そこで、武夷山の茶農家は、茶園の畝に大豆や菜の花を栽培することで、チャノキに窒素、リン、カリウムなどの栄養を与える。大豆の属するマメ科植物は、貧栄養な土壌でも生きられる特殊能力をもつ。それは根粒菌という細菌との共生によって獲得したものである。根粒菌は単細胞の細菌の一種であるが、窒素ガスをアンモニアに変換できる（藤井、2022、p.272）。大豆は、タンパク質を作るために、大量の窒素を必要とするが、窒素の半分以上を根粒菌からの供給に依存している。窒素肥料を作るために、大量のエネルギーが必要となるため、チャノキと共生している大豆は光合成を行い、糖分を根粒菌に提供しなければならない（藤井、2022、p.273）。

図1　武夷山の茶畑に植えられた大豆（筆者撮影）



武夷山の茶農家たちは、このようにして岩韻を取り出す技術を発展させてきた。茶農家たちは、伝統的な製茶技術を使って、茶葉それぞれの特徴や空気の温度、湿度などをしっかり把握した上で、岩韻の味を抽出する。茶葉に含まれる物理的および化学成分の組成と含有量は茶の品質形成の基礎であり（骆（らく）、2015、p.415）、土中の窒素、リン、カリウムなどのミネラル要素は茶の品質と収量の形成に密接に関係している。それらの元素を適切に与えることで、茶葉の物理的および化学成分の含有量を増やすことができ（张（ちょう）・王、2020、pp.2-8）、ひいては岩韻の質を向上させることができる。

このように、武夷山の大地（岩、川など）、動植物、微生物が茶栽培に適した環境を整え、光、気候、クロロフィルb、アミノ酸、窒素、リン、カリウムが茶に岩韻の芳香物質の形成を促して

いる。そこでは、物理環境と人間を含む生物活動が相互生成することで、武夷岩茶が栽培されている。最後に、人間の介入により岩韻を含む茶葉が収穫される。言い換えれば、生命と非生命を含めた複数のテレストリアルが絡まり合って、岩韻が生み出されてきたのだといえよう。それは、物理環境の中に潜む「静的な」テロワールではない。単なる資源ではなく、物理環境と生物活動の複雑な生成活動なのである。

## 6. 武夷岩茶の岩韻をめぐるジオントロジー

中国の国立公園は、それまでの観光を主な目的とした数多くの観光地とは異なり、2013年に中国の国家林業と草原管理局のもとで管理されるようになった。2016年には、この国立公園の最初の実験場として「武夷山国立公園」が設立されている。その後、2021年10月に正式に中国国立公園が設立された（中国国家発展改革委員会、2021）。それを踏まえて、本節では次に、ジオントロジーの概念を援用しながら、武夷山においてどのような「政治」が行われているのかを探ってみたい。

中国の国立公園の管理制度の基本的な考え方は、欧米等の先進国のモデルを参考にしている（王、2003、p.93）。蘇が言うように、中国自然保護区内およびその周辺の村では、他の地域より経済が遅れ、貧困に悩まされている地域が多くある。このように、経済が立ち遅れ、教育・医療水準が低い貧困地域に立地する自然保護区は、管理・運営において村の生産・生活を十分考慮しなければならない。しかし、自然保護区の計画・立案の段階では、自然環境の保護のみを強調し、地元住民たちとの協力関係はほとんど無視されていたのである（蘇、2004、p.17）。言い換えれば、国立公園側と地元住民との関係は平等・協力の関係ではなく、管理する側と管理される側の関係となっているのである。この点は、ポヴィネッリが論じた後期リベラリズムとは大きく異なっている。しかし、社会的差異[8]の統治がめざされている点では同じであるために、中国の社会経済環境にポヴィネッリの議論を応用することは可能である。



武夷山国立公園が設立されて以来、地方政府は住民を含めて山に対する管理をさらに強化し始めた。とくに、地方政府による観光開発や「生態移住政策（ecomigration）」の施策に伴い、山の中に暮らしてきた数千人の住民が他の地域に移住させられるようになった。加えて、地方政府は、地元住民が許可なしに茶を栽培して、生態環境を破壊していたと捉えている。武警部隊、雇用された人々、森林警備隊員、地方林業局の関係者などが出動して、2008年以降に許可なしに植えられたすべてのチャノキを刈り取ることを強制したこともあった。こうした経緯で、地元住民のあいだでは、とくに地方政府への憎悪がくすぶり、それはやがて紛争状態へと発展し、暴力が深刻な問題となりつつある。

筆者は、茶農家Z氏によれば、Z氏のチャノキと同じ村の多くの地元住民たちのチャノキが刈り取られた。Z氏は次のように語ってくれた。

> 私たちにとって、山はたんに資源として存在するのではなく、自分の祖先や神が山に宿っている。例えば、私たちの生活を支えるもの――山からもらった動物、植物（茶、薬草）、果物、キノコなど――は、山の神と祖霊に与えられた贈り物だと考えている。山は、食糧、販売する狩猟肉および茶が集められ、あるいは自分たちの祖先と神とのコミュニケーションの場である。人間はその場の一員に過ぎず、支配者ではない。加えて、山には神、亡くなった先祖の魂がおり、誰かが山を破壊すると悪運に襲われるという言い伝えがある。

しかし、自然保護区や国立公園の設立をするために、みんな山から追い払われたため、生産活動を続けることが難しくなった。そのために、山から切り出した木材を横倒しにして、何度も保護区の入口を封鎖し、政府に抵抗し、地方政府と風景区管理委員会に圧力をかけてきた。その後、福建省政府はこの問題を重く受け止めたようだ。私は補償金を受け取った（2023年8月30日インタビュー）。

Z氏の語りから、地元住民たちにとっては、人間、動植物、精霊、神、祖霊などから構成されるコミュニティーの中で、諸存在が出会い、その関係性の中で互いが生成するという図が読み取れる。それに対して、観光開発や生態保護のプロセスにおいて、人々が親しんでいる山や川、岩や風といった大地の存在それ自体が無視されてきた。先祖から受け継いだこれらの大地は、そこでは、単なる人間ならざるものにすぎない。ジオントロジーを敷衍（ふえん）すれば、地方政府は「生きている人間対死んでいる大地」という構図のもとで、観光開発を進めているのだといえよう。

振り返れば、茶農家は、自然を人間の征服と搾取の対象としてではなく、自然そのものの一員として、自然とともに生きている。その点で、自然と人間は連続している。ここでは、あらかじめ山や植物などが情動的存在なのでなく、人々との間で関係を取り結び、とりわけ茶生産という日常的な実践を通じて、そのつど情動的な存在として立ち現れる[9]。住民たちは、フーコー的なバイオパワーである「生｛誕生、成長、生殖｝対死」を、ビオス／ジオスの二項の内側に取り込んで、「生命（生｛誕生、成長、生殖｝対死）対非生命」というジオントロジーの図式をもとに理解していることになるのだ。

武夷山周辺では今日、大地や動植物などの存在が観光開発の資源として利用され、人間と自然が切り離され、ますます人間に対するバイオパワーが行使されるだけである。政府は、「生｛誕生、成長、生殖｝対死」のみに焦点を当てることで、「生命と非生命」のビオスとジオスを無視してきたのである。政府の発動する権力は、住民からの抵抗を経て、補償金支払いの問題の交渉へと矮小化されてきた。武夷山の大地の形成という悠久の歴史の中でチャノキの生育に適した環境が整えられてきたが、今日の武夷山における諸存在の関わり合いは、ポヴィネッリを援用して述べれば、「生｛誕生、成長、生殖｝対死」と「生命と非生命」の境界で不断に揺れ動いているのだと言えるだろう。



## 7. 結語

本稿は、ラトゥールのテレストリアルとポヴィネッリのジオントロジーの概念を下敷きとして、それを筆者の調査した中国福建省の武夷山の茶栽培の事例に当てはめて検討してきた。本稿では、人間の活動の中のテロワールに焦点があてられた先行従来の研究から、テレストリアルという存在論的な概念をふまえて、大地存在論へと進むことで、新しいマルチスピーシーズ民族誌の展望を示してきたことになる。

武夷山の大地（岩、川など）、動植物、微生物、人間は共に、茶栽培に適した環境を整えるだけでなく、豊富な栄養分が茶に与えられることで、岩韻の形成を促してきた。この意味で、物理環境と人間を含む生物活動が相互生成しているといえよう。言い換えれば、生命と非生命を含めた複数のテレストリアルが絡まり合って、チャノキの生育が促され、岩韻が形づくられてきたのである。

岩韻とは、人間にとっての単なる資源ではない。物理環境と生物活動の複雑な生成活動なので

ある。その中に、人間の茶栽培という活動が位置づけられる。

今日、政府によって、国立公園が設置され、観光開発が進められてきている。その背景にあるのは、茶農家にとってテレストリアルであるとともに、情動的存在としての非生命である大地が、政府から見れば死んでおり、観光資源としてのみ利用されているということである。そのことにより、茶農家は、補償金支払いの交渉へと駆り立てられるだけでなく、自分たちが深く依存してきた精神的な故郷である大地からますます離れていってしまうという状況にある。

今日、土地権をめぐって争われる駆け引きとは、ポヴィネッリの図式に倣えば、「生{誕生、成長、生殖}対死」と「生命対非生命」の境界上で起きる問題なのである。今後の課題は、変わりゆく中国の政治・経済の仕組みの中で、このジオントロジーの見通しの詳細について調査研究を進めて、十分な分析を行うことである。

**註**

1 マルチスピーシーズ民族誌／人類学は、それ以前に現れた「人類学の存在論的転回」の研究関心を部分的に引き継ぎながら生み出されたとされる。箭内匡は、自然の人類学（「存在論的」人類学）の流れは、1990年前後に起源をもつ、自然をめぐる文化・社会人類学の第一波であり、その第二波が、2010年以降のマルチスピーシーズ人類学であると述べている（箭内、2022）。

2 存在論的人類学には批判も寄せられている。ここでは、デヴィッド・グレーバーとヴィヴェイロス・デ・カストロとの議論を見てみよう。マダガスカルのメリナ人が用いるフェティッシュ（雹（ひょう）をとめる呪符）をグレーバーが実際には農民の作物を雹から守れないと言明し、西洋の理論枠組みで解釈したことがヴィヴェイロス・デ・カストロによって批判された（グレーバー、2020）。「根本的他性」を認めることをテーゼとする存在論的人類学にとって、現地の人々が世界を間違って理解しているかのような説明は、西洋的な存在論の一方的な押し付けを意味する（グレーバー、2020）。それに対して、グレーバーは、根本的他性を強調する立場から距離を取っている。根本的他性の存在論が自明視されるとき、その対極にある「私たち」の存在論も疑いないものとして守られる。グレーバーは、そこに「西洋科学」や「常識」に挑むことなく、それを支える権威の構造をも守ろうとする保守的な傾向を見出した（グレーバー、2020 ; 松村、2023）。

3 ここでは、割愛せざるを得ないが、土壌の人類学（Anthropology of Soil）は、人間と土壌の複雑なつながりを独自の視点から明らかにしてきていることを指摘しておきたい（Clement, 1988 ; Kawa, 2016）。「テラプレタ（terra preta）」という土壌は、南米のアマゾン地域に見られる土壌の一種であり、アマゾニアの人々の生活や文化に多大な影響を及ぼす重要な存在と考えられている。アマゾンの人々と土壌とのあいだには、しばしば「バタリャ（戦い）」と呼ばれる関係性が存在する。この戦いは、土壌に生息する多種との共同作業ともいえよう。テラプレタは、人間が土壌と深い絆で結ばれた関係を維持していることを意味するのである（Kawa, 2016, p. 71）。テラプレタは、人間と土壌との相互関係を強調し、世界を形成する上でさまざまな生命と非生命が協力していることを認めるよう促している。その点で、土壌の人類学の試みもまたラトゥールのテレストリアルに近いと読むことができる。

4 ポヴィネッリは著作『放棄の経済』で、後期リベラリズムを定義している。それは、反植民地運動と新たな社会運動の出現を契機とした社会的差異の統治を指すのに対し、新自由主義は1970年代に始まった市場の統治を指す（Povinelli, 2011 ; Povinelli, 2021）。

5 フーコーによれば、権力は社会全体に普遍的に広がり、権力関係は異なる場面で異なる形態をとり、知識や監視などがその発現の重要な要素であるとされる（Foucault, 1976）。その中で一つは、個々人の身体に働きかけて、それを規律正しく従順なものへ調教しようとする面である。学校や軍隊において働くこの種の権力は「規律権力」とも呼ばれる。もう一つは、統計的な調査等々にもとづいて住民の全体に働きかけ、健康や人口を全体として管理しようとする面である（Foucault, 1976）。

6 砂漠は生命と非生命の区別を保持し、生命が常に非生命の忍び寄る砂に脅かされている可能性をドラマチックに表現している。アニミストとは、あらゆる生命体のあいだに等価性を見出す者、あるいは他の者が生命の欠如を見出すようなところに生命を見出すことができる者のことである。ウイルスと

その中心となるテロリストの想像性とは、政治的・社会的なものを人間以外の動物、植物、地質学的なものに開放することによって、現在の国家、市場、社会性の生物学的な組織を破壊しようとするすべての存在者のことである（Povinelli, 2016, pp. 58-61）。

7 オーストラリアの哲学者であるエリザベス・グロスは、「大地の力」を論じる。グロスによれば、大地は生きる者たちに場所、温度、水分、時間などの機会と条件を提供するコズミックな力を有し、それによって生きる者たちを変様させつつ、生きる者たちの触発する力を受けながら、ともに何かになっていく（グロス、2020、p. 174 ; 森、2021）。

8 後期リベラリズムは法の平等性だけでなく、社会的・経済的な差異や不平等にも焦点を当てている。ここでの社会的差異は、地域の経済格差、教育・医療の不平等、そして管理する側と管理される側の不平等な関係などを指す。

9 ここでは情動に関して簡潔に述べておくことにしよう。情動は、英語で言えば. emotionとaffectがその語源で、17世紀のスピノザの「アフェクトゥスaffectus」概念に由来するとされる（西井・箭内、2020、p. 1）。スピノザ的なアフェクトゥスは、人間や動物や植物や石などの存在は、影響・作用されることの中で生まれ崩壊し、そして消えていくことそれ自体だという方向から物事を眺めることである（西井・箭内、2020、pp. 2-3）。物事を、影響・作用され、影響・作用する関係の中で見るならば、人間のみの情動に限定して語ることは、十分でない可能性がある。

情動について、一つの事例を挙げてみよう。ウィラースレフは、シベリアの狩猟民・ユカギールの狩猟者スピリドン爺さんが「エルク＝人間」（非人間＝人間）になるシーンから民族誌記述を始めている（ウィラースレフ、2018）。ウィラースレフは、「人間ではない動物に対して（また、無生物や精霊といった動物ではないものに対してさえ）、人間の人格と同等の知的、情動的、霊的な性質を与えるこうした一組の信念は、アニミズムと伝統的に呼ばれている」（ウィラースレフ、2018、pp. 12-13）と述べている。ユカギールの狩猟者だけではなく、人間以外のエルクや熊、精霊なども情動的な存在だと指摘する。

それに対して、武夷山周辺地域の地元住民の情動とは、人間だけではなく、人間を含むあらゆる存在に対する感情なのである。言い換えれば、山や川、動物、植物、精霊などといった他種も情動的な存在であり、人間との関係を結ぶ過程の中でそれらの情動が表出するのである。



**参考文献**


Barham, E. (2003). Translating terroir: the global challenge of French AOC labelling. *Journal of Rural Studies*, 19(1), 127-138.

Besky, S. (2013). *The Darjeeling distinction: Labor and justice on fair-trade tea plantations in India.* Berkeley: University of California Press.

Chao, S. (2018). In the shadow of the palm: Dispersed ontologies among Marind, West Papua. *Cultural Anthropology*, 33(4), 621-649.

藤井一至（2022）.『大地の五億年――せめぎあう土と生き物たち』ヤマケイ文庫.

冯卫虎（2000）.「武夷岩茶“岩韻”形成的体会」『福建茶叶』（04）、43.

フーコー, M.（1986）.『性の歴史1――知への意志』（渡辺守章・訳）新潮社［原著：Foucault, M.（1976）. *Histoire de la sexualit 1.* La volonte de savoir (Paris: Gallimard)］.

グレーバー, D.（2020）.「根本的他性、あるいは「現実」について」（難波美芸・訳）『思想』1158、7-58［原著：Graeber, D. (2015). Radical alterity is just another way of saying “reality” : A reply to Eduardo Viveiros de Castro. Hau: Journal of Ethnographic Theory 5 (2), 1-41］.

グロス, E.（2020）.『カオス・領土・芸術――ドゥルーズと大地のフレーミング』（檜垣立哉・監訳）. 法政大学出版局. ［原著：Grosz, E. A. (2020). Chaos, territory, art: Deleuze and the framing of the earth. Columbia University Press］.

黄进（2015）.『武夷山丹霞地貌』科学出版社.

韩莹（2011）.『氮磷钾配施对茶树生理代谢和茶叶品质的影响』河南农业大学.

池田純一（2020）.「書評　トランピズムに対抗する〈テロワールの政治哲学〉を求めて――『地球に降り立つ』」https://wired.jp/2020/05/16/terrestrial-ikeda-review/（2023年9月10日アクセス）.

Kawa, N. C.(2016). *Amazonia in the anthropocene: People, soils, plants, forests.* Austin: University of Texas Press.

ラトゥール, B.（2019）.『地球に降り立つ――新気候体制を生き抜くための政治』（川村久美子・訳）新評論［原著：Latour, B. (2018). Down to earth: Politics in the new climatic regime. Polity].
骆耀平（2015）.『茶树栽培学』中国农业出版社.
ラブロック, J. E.（1984）.『地球生命圏――ガイアの科学』（スワミ・プレム・プラブッタ・訳）工作舎［原著：Lovelock, J. (1979). *Gaia: A new look at life on earth.* Oxford University Press].
松村圭一郎（2023）.『旋回する人類学』講談社.
Miller, T. L. (2019). *Plant kin: A multispecies ethnography in indigenous Brazil.* Austin: University of. Texas Press.
森正人（2021）.『文化地理学講義――〈地理〉の誕生からポスト人間中心主義へ』新曜社.
西井涼子・箭内匡（編）（2020）.『アフェクトゥス（情動）――生の外側に触れる』京都大学学術出版会.
布目潮フウ（2012）.『茶経――全訳注』講談社.
奥野克巳（2023）.「生命の薄膜――ラトゥールとマルチスピーシーズ人類学」『現代思想――ブルーノ・ラトゥール』51（3）、229-241.
Povinelli, E. A. (2011). *Economies of abandonment: Social belonging and endurance in late liberalism.* Durham: Duke University Press.
Povinelli, E. A. (2016). *Geontologies: A requiem to late liberalism.* Durham: Duke University Press.
Povinelli, E. A. (2021). *Between gaia and ground: Four axioms of existence and the ancestral catastrophe of late liberalism.* Durham: Duke University Press.
Povinelli, E., Coleman, M., & Yusoff, K. (2017). An interview with Elizabeth Povinelli: Geontopower, biopolitics and the anthropocene. *Theory, Culture & Society, 34(2-3),* 169-185.
邵长泉（2016）.『岩韵―武夷岩茶人文地理』海峡文艺出版社.
Trubek, A. (2008). *The taste of place: A cultural journey into terroir.* Berkeley: University of California Press.
ウィラースレフ, R.（2018）.『ソウル・ハンターズ―シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』（奥野克巳・近藤祉秋・古川不可知・訳）亜紀書房［原著：Willerslev, R. (2007). *Soul hunters: Hunting, animism, and personhood among the Siberian Yukaghirs.* Berkeley, CA: University of California Press].
武夷山市编撰委员会（編）（1994）.『武夷山市誌』中国統計出版社.
新华网（2022）.「在茶园遇见油菜大豆――茶科技融入武夷万重茶山」http://www.xinhuanet.com/local/2022-05/14/c_1128650425.htm（2023年10月25日アクセス）.
肖坤冰（2020）.『人类学观茶』民族出版社.
萧天喜（編）（2008）.『武夷茶经』科学出版社.
箭内匡（2020）.「スピノザと「植物人類学」」箭内匡・西井涼子（編）『アフェクトゥス（情動）――生の外側に触れる』（pp. 43-69）京都大学学術出版会.
箭内匡（2022）.「多種（マルチスピーシーズ）民族誌から「地球の論理」へ」『思想』1182, 82-102.
张渤・王芳（2020）.『武夷巖茶』复旦大学出版社.
中国茶叶博物馆（編）（2019）.『中国茶事大典』中国农业出版社.
中国地理百科丛书编委会（2015）.『武夷山脉』世界图书出版公司.
中国国家発展改革委員会（2021）.「国家公园体制试点进展情况之六――武夷山国家公园」https://www.ndrc.gov.cn/fzggw/jgsj/shs/sjdt/202104/t20210423_1277175.html（2023年8月1日アクセス）.
赵希林（2020）.『武夷山成矿带』中国地质大学出版社.